終戦直後における陵墓をめぐる動向

外池　昇

はじめに

終戦直後における陵墓をめぐる動向については、これまで主に仁徳天皇陵発掘の提案をめぐって取り上げられてきた。例えば、向谷進『考古の巨星――末永雅雄と橿原考古学研究所――』（一九九四年、文藝春秋）は第四章「戦後初公開の正倉院宝物――末永考古学の確立――」で、昭和二十一年十～十一月の正倉院展、昭和二十三年七月二十日以降の末永雅雄氏の登呂遺跡調査への参加、また昭和二十四年一月二十六日の法隆寺金堂の火災等と並べて、昭和二十三年末のエドウィン・O・ライシャワーハーバード大学教授による人文科学団顧問日本史担当としての関西訪問に触れてこの問題を取り上げている。これによると、ライシャワー氏が京都大学人文科学研究所で各分科の学者たちと協議した際、京都大学考古学教室助手の小林行雄氏が、アメリカの援助で仁徳天皇陵の発掘ができないかと提案したのに対し、ライシャワー氏に意見を求められた末永雅雄氏が「日本はいま、疲弊の極に達している。調査陣営の編成・各種資材が整わない。及び占領軍の各部隊が来ているが、いま天皇陵を掘ることは国民感情の点から好ましくない」と述べたという(1)。

そして、『読売新聞』平成二十年三月十八日付（夕刊）「古墳考二〇〇八」三「陵墓が『聖域』になる前は…」（片

岡正人氏）は、この間の経緯について次のように述べる。

（略）１９４８年（昭和23年）末、後に米国駐日大使となったライシャワー博士から「仁徳陵（大阪府堺市、大山古墳）を発掘する計画があるなら米国が援助できるよう努力したい」という提案が持ち込まれ、学界は騒然となる。この時、反対に回ったのは、明治大学の後藤守一教授（当時）。理由が興味深い。「皇陵を発掘することは国民感情の上からいつても望ましくないし、掘つても大した考古学的資料は出て来ない」（読売新聞・49年4月27日付記事）

しかし早速、この発言を批判する投書が5月4日付で掲載された。「千五百年も前の考古学的存在である皇陵を発掘することによつて神聖なものを犯すという感じ方が、ひどく近代的な知性と相反する（一部略）」。東京都内の主婦からである。

結局、発掘は見送られたが、49年度から2年間にわたり、仁徳、応神、履中各陵の外形調査が行われた。長く禁足の地だった陵墓の学界による調査が実現したのである。

本稿はこのような指摘に導かれつつ、おおむね昭和二十一年から同二十七年頃までにおける陵墓をめぐる動向を具体的に明らかにし、当時、陵墓がどのように考えられていたかを考察することにしたい。

一、「文化国家再建の一翼を」（宮内省図書寮「展覧会」）

昭和二十一年五月に行なわれた「図書寮善本展覧会」第十四回は、終戦直後における陵墓をめぐる動向の嚆矢というべきものである。この「展覧会」は「一和書（御陵墓）」と「二漢籍（唐詩別集）」が主題であり、「一和書（御陵墓）」の内容は次の通りである。

イ高塚式陵墓　崇神天皇陵ノ図（文久山陵図草稿鶴澤探眞）以下、前方後円墳、方墳、上円下方墳の代表的陵墓の図及び写真八点

ロ高塚式古墳ノ構造（外部）葺石（貼石）写真、円筒埴輪等六点、（内部）赤坂山古墳ノ図　諸陵周垣成就記、石棺ノ写真等五点

ハ堂塔式陵墓（法花堂）後白河天皇陵ノ図、（多宝塔）近衛天皇陵ノ図　文久山陵図草稿等五点

ニ山陵ノ守護　日本書記（ママ）巻三十（谷森本・文政版）、

令集解巻四、高倉院法花堂尾州国富庄之事（壬生文書）等六点
ホ山陵ノ祭祀　類聚符宣抄第四（壬生本）、朝野群載第二十一（柳原本）等五点
ヘ陵墓ノ探索ト修理　前王廟陵記（松下見林）、山陵志（蒲生秀實）、諸陵周垣成就記（細井知慎）等十二点
ト副葬品[2]

図書寮による「図書寮展覧会」は、大正四年六月に第一回が「大礼記念展覧会」として行なわれて以降、大正六年四月に第二回、昭和三年九月に第三回が行なわれており、この内第二回では「陵墓関係図書」が主題のひとつとされ「前王廟陵記、山陵図絵、享保御陵記、山陵図会、山陵志等陵墓に関する図、考証、記録文書等百二十四点[3]」が展観されている。終戦直後には第一回が昭和二十一年二月に開催されてから、「社会思想混頓たる中、文化国家再建の一翼を担[4]」ってほぼ毎月開かれた。

二、「世界一の大古墳・大山陵」（『科学朝日』）

『科学朝日』第八巻第七号（昭和二十三年七月、朝日新聞東京本社）は「日本の古代技術1」として梅原末治「世界一の大古墳・大山陵[5]」を載せ、「仁徳天皇陵『大山陵』最初の空中写真」を「越智本社写真班員撮影」として掲載する。同論文の主旨は、「編集部」が「さきごろ本社の写真班員が　進駐軍の諒解と援助の下に　初めて大阪府下堺市の仁徳天皇陵『大山陵』の空中写真を撮影することに成功した。戦前までは神秘の霧にかくされて　うかがうことは勿論　その上空を飛行機で飛ぶことさえも許されなかつたことを思えばまことに大きな時代の変りかたである[6]」とし、梅原氏も「（略）これ（引用註、仁徳天皇陵〔大山陵〕）が外観の上から秦の始皇帝陵をしのぎ　エジプトの最大のピラミツドにくらべても3倍以上の大きさであり世界最大の墳墓であることが早くから一部の人たちの間で注意されていた。しかし今までは　わが特殊な国体観から　明治以後これらの御陵は宮内省の厳重な管理の下に置かれたために進んで塚自体の実際を明らかにすることが許されず　ただ外部からこれをうかがうにすぎないという有様で　学問の上からは殆ど閉ざされたまま過ぎて来たのである[7]」とし、さらに「ところが終戦後　諸般の事情が革新されて来たこととともに　この陵について　さきごろ大阪朝

日新聞の写真班が　進駐軍の諒解と援助の下に　航空写真を撮影してその実際を明瞭に示す資料を公表したことから　新たに世人の関心を高めるに至り　われわれもまた正確な実測図を手にする機会にめぐまれて　ここにはじめてわが上代における最大の規模をもつた陵の実体を検討できることになつたのである」[8]とする通りである。

また同論文は「仁徳天皇陵の実測図」と「大山陵の大きさ比較図」（同一縮尺の「仁徳天皇陵」「秦始皇帝陵」「大ピラミッド」の平面図）を掲載する[9]。

三、「仁徳天皇御陵開放」（『堺時報』）

『堺時報』第十二号（昭和二十三年八月十日）は、「仁徳天皇御陵開放[10]」として「（略）仁徳天皇御陵の一部を開放して貰つてこれを公園にし様と言う計画が市都市計画課で立てられ、総理庁へ許可の申請をすることになつた、外濠と中濠との間の堤を開放して貰い、濠にはボートを浮かべ、堤にはベンチを設け橋を架けて、府市民はこゝで静かに鳥の声を聞いたり、松風を聴いたり、水鳥の遊ぶのを見て楽しもうと言うのである、これが許可されたらやがて全国の御陵も開放される導機となるだろう[11]」とする。この「計画」のその後の経過は不明であるが、「全国の御陵」の「開放」をも視野に入れた論調からは当時の陵墓をめぐる一ある種の考え方の一端が伺われる。

四、「撮影を許され」（『アサヒグラフ』）

『アサヒグラフ』新年特大号（昭和二十三年十二月二十九日・昭和二十四年一月五日合併号）は、「世界一の大墳墓」との見開き二頁の「本誌特派記事米田保・写真青井竹三郎」によるグラビアを掲載し、「考古学、土木技術等、各界学者の関心を集めながら墳墓としての性質上、域内に立入りを許さず、柵にかこまれた鬱蒼たる山容は一度も窺い知ることができなかつた。このたび、本誌は、特に主墳内奥の一部を除き撮影を許され、その概貌を初めてここに紹介する」として、仁徳天皇陵の計八葉の写真と説明を載せる。

写真には、「正面」「内堤」、また「進駐軍の援助による空中俯瞰写真」もあるが、特に注目されるのは域内の写真とその説明である。説明に「内堤西北角より主墳後円部を

望む　最高部は三十四メートル六　この後円丘の地底に石室　石棺が埋葬されているといわれるが　戦国時代に城砦に利用された跡があるから既に地底は荒らされてるとの説もある」「内濠　人影稀なため鳥禽類の天国　数千羽の鴨　五位鷺　鵜が乱れ飛び正に塵外の境」「内堤の縁に発掘された円筒形埴輪の残骸　一間につき四ヶの割合で三重四重に主墳を囲繞し林立したろう盛観がしのばれる　この埴輪は全部を合せれば数十万に達すると筆者は推定する」「上の円筒埴輪の残骸が残る内堤　幅約三十メートル　延長約三キロ半　老松と雑草の茂み合う中に巡警の順路に踏みならされたわずかな小道が通じている」「舟で濠を渡り一歩主墳に入ると　昼なお暗い密林　松　杉　ヒノキ　カヤ　が茂り　蔦カズラが巻きついている　地面は朽葉に覆われ腐臭を発し　警士の話によれば　時々は胴まわり一升ビン程の大蛇も見られ　狐狸の類も棲むという」とある通りである。

五、“Grave of Emperor May Be Excavated”（『ニッポンタイムス』）

『ニッポンタイムス』（英字紙）“Nippon Times”昭和二十四年三月二十四日付（第一面）が載せる“Now It Can Be Told”（今だからこそいえる）“Emperor Jimmu Was Not First Ruler of Japan”（神武天皇は日本の最初の統治者ではなかった）“Present Histories 10 Centuries Off, Scholar Claims After Exhaustive Studies”（最新の歴史学では十世紀の差、徹底的な研究の末に学識者は主張）との見出しの記事[12]は、その後の陵墓をめぐる動向の前提として位置付けられるものである。

これによると、人類学者石田英一郎氏はこの前日に声明を出したが、それは、日本で初めての天皇は神武天皇ではなく、四世紀のはじめに恐らく満州もしくは朝鮮半島から来たと考えられる崇神天皇であり、このことは、近代以降公的な日本の歴史によって主張されてきたように皇室が創立されたのは紀元前六六〇年ではなく、それよりも十世紀も後のことであることを示唆する[13]、というのである。さらに、日本の歴史学者や考古学者、そして人類学者にとって、大衆が読むためのこの国の歴史の著作について革命的な変化が到来したという意見は全員一致だと、江上博士ははっきり述べている。さらに江上博士は、神聖なものとして見做されていた問題への調査に関して、政府によって何十年

もの間採用されてきた極秘で不可侵な方針が著しく緩和したので、考古学や歴史学者、そして人類学者にとって多くの手付かずの領域が存在すると固く信じている[14]ともいう。

記事は第二面の“Jimmu Was Not 1st Ruler Here”（神武天皇は初代の天皇ではなかった）との見出しの記事に続く。このなかで、巨大な陵を造る習慣が導入されたが仁徳天皇陵がピラミッドの数倍広いことは記憶されるとする[15]。

『ニッポンタイムス』同年三月三十一日付（第一面）で“Grave of Emperor May Be Excavated”（天皇陵は発掘されるであろう）“Discoveries Which May Surpass Those Made at Tutenkhamon's Tomb Expected”（ツタンカーメン墓を凌ぐ発見が期待される）との見出しの記事[16]を載せ、計画はそのような事業に向けて静かに進み、天皇の二番目の弟の高松宮が発掘委員会の座長に推戴されたと確実な筋によって報じられた際その頂点に達し[17]、その間に、現在は合衆国にいるハーバード大学のE・Oライシャワー博士が数ヶ月前から高松宮とともに提案された科学的な研究事業について意見を交換した[18]とし、さらに、東京大学教授で日本史研究の第一人者である池内博士は、数年前、被葬者についての当時の記録を欠く陵墓の発掘の提案をした際激しく攻撃された[19]と述べる。

そして同日付第二面は、“EMPEROR NINTOKU'S MAUSOLEUM”（仁徳天皇陵）として仁徳天皇陵の航空写真を掲載する。その説明は、この珍しい航空写真は戦前に軍によって撮影されたものである[20]とするが、この写真は、すでに二、「世界一の大古墳・大山陵」（『科学朝日』）でみた、『科学朝日』に掲載され「さきごろ大阪朝日新聞の写真班が進駐軍の諒解と援助の下に」（梅原「世界一の大古墳・大山陵」）撮影されたと説明された写真（「仁徳天皇陵『大山陵』最初の空中写真」）と酷似する。

『ニッポンタイムス』同年四月二日付（第三面）は“NINTOKU'S REIGIN PUZZLES LAYMAN”（仁徳天皇の治世は素人を手こずらせる）“Historians Claim Emperor Was Ruler for 86 Years and Died at 83”（歴史学者の非難は天皇の治世が八十六年であるのに亡くなった時八十三歳であったことである）との見出しの記事を載せる[21]。この記事は、仁徳天皇をめぐるさまざまな問題に言及しつつ、右の三月三十一日付第一面の仁徳天皇陵発掘計画の記事が学者ばかりでなく一般をも揺り動かしたことと、同記事がアメリカからのものを含めていくつかの質問の回答によるものであ

ることをも述べる。[22]

『ニッポンタイムス』同年四月十七日付（第一面）は"5-Year Plan Is Mapped To Excavate Mausoleum"（天皇陵発掘の五か年計画）"Project to Be on Such Gigantic Scale That Bill May Have to Be Introduced in Diet"（巨大規模の計画国会に議案として提出）との見出しの記事[23]を載せる。

これに続く同日付第二面の記事も併せてみると、仁徳天皇陵とピラミッドを規模の上で比較しつつ仁徳天皇陵の考古学的な価値を述べることを主題としながらも、同時に、発掘計画の実現へ向けての動向についてもよく述べており注目される。つまり、当初は政府からの基金が必要な程の巨大な計画とは考えられていなかったが、全国から集まった学者達が出した結論は、多額の経費と専門家による五年以上の期間が必要で、その五か年計画の背後には、東京大学の原田淑人博士・江上波夫博士、明治大学杉原荘介教授、京都大学水野清一博士[24]があり、彼等の計画は事業を継続させるための基金を拠出させるための政府の会議を開くことであったが、その間にこれらの人々は高松宮と話をしたとされ、当時はすでにアメリカに帰国していたハーバード大学のエドウィン＝ライシャワー博士からの、ハーバード大学が陵墓の発掘企画の一部を負担する可能性についての発言を待っていた[25]というのである。

また同日付第二面には、"NINTOKU'S TOMB"（仁徳天皇陵）として仁徳天皇陵・秦始皇帝陵・ピラミッドの同一縮尺の平面図を載せるが、これは、二、「世界一の大古墳・大山陵」（『科学朝日』）でみた、『科学朝日』に掲載された梅原「世界一の大古墳・大山陵」の「大山陵の大きさ比較図」を一部改変したものである。

六、「仁徳陵を発掘の提案」（『読売新聞』）

『読売新聞』昭和二十四年四月二十七日付（第三面）は「仁徳陵を発掘の提案／世界最大古墳に国際的の援助」との見出しの記事を載せ、ライシャワー教授をめぐる動向を次のように報じた。

（略）昨年末来訪したアメリカ人文科学顧問団中のハーバード大学日本史担当ライシャワー教授が日本側委員会の東大教授江上波夫氏と会談したとき、もし仁徳陵を発掘する計画が日本側にあるならメソポタミア、エジプト、インカの遺跡発掘のさいと同様、各国で共同資金をつく

り、〝国際的発掘〟を行うのが費用、技術の点で最も適当と思うから米国の援助が得られるよう努力しようとのべ、一月帰米した、最近同教授から「仁徳陵発掘の計画はすゝんでいるか」との問合せがあり、これに対し日本の考古学界は賛否両論にわかれるにいたつた

同記事は続けて「反対論者は天皇の陵を発掘することは国民感情にさからい、いくら科学の名によつても許されない、すでに明治五年アラシのため前方部の石棺があらわれ金メツキのヨロイ、カブト、鏡、太刀、ハニワなど種々の遺物が出土しているからいま発掘してもたいしたものは出て来ないであろうというのである、これに対し賛成論者は神話のベールにおおわれた古代史を科学的に書直すためにはぜひ必要だという」と述べた上で「両論対立のまゝ考古学古墳調査委員、東大江上、飯塚、仁井田教授山本助教授、明大後藤教授、文部省犬丸人文科学課長らが卅日会合最終的態度を決定のうえライシヤワー教授に回答することとなつたものである」とする。

さらに「国内に賛否両論」として、「せめて表面調査でも」との見出しで東大江上波夫教授の「仁徳陵は〝地底の法隆寺〟ともいうべき貴重な資料だ、土木技術の上からいつても高さ卅四メートルの大山陵は三重のホリを掘つた土を盛りあげて作つたものではないかと思われるが、従来測量も十分行われず、ホリの深さも知らなかつたが表面調査でも許されたらこの点も明かとなろう」との談話を、「大きな収穫はない」との見出しで明大後藤守一教授の「皇陵を発掘することは国民感情の上からいつても望ましくないし、掘つても大した考古学的資料は出て来ない、少なくとも私は発掘には反対だ」との談話を載せる(26)。

『読売新聞』同年四月二十九日付（第一面）は「編集手帖」欄でこの間の経緯を論評する。「ハーバード大学のライシヤワー教授が世界最大の古墳仁徳陵の国際的共同発掘を提案して来た。二つ返事でOKするかと思いきやわが考古学界はこれに対する賛否の両論があるという」との書き出しで発掘反対論を難じ「仁徳陵は発掘すべきである。学者の良心と、科学者の真理探究の神聖な態度をもつて発掘し、そこから古代日本の文化のほんとうの姿を掘りだすべきである」等とし、「一千五百年前の文化財を地下に眠らせておくことはわが国考古学界の昼寝をイミする」と結ぶ。

『読売新聞』同年五月三日付（第三面）は「仁徳陵発掘はしない」との見出しで、同年五月二日に明治大学で開か

れた「古墳調査に関する懇談会」での東京大学飯塚、江上両教授、明治大学後藤教授、杉原助教授、渋沢敬三氏、言語学者江実氏等の会談の結果を伝えた。それによると、「日本考古学協会としては仁徳陵発掘は計画していないが御陵以外の全国古墳発掘調査の五ヶ年計画があるから日本古代文化研究に対する協力援助を期待するむねライシヤワー博士に対し江氏を通して回答すること、なつた」という。

『読売新聞』同年五月四日付（第一面）は、「気流」欄で「東京都・林□子・主婦」の投書を載せる。「仁徳陵の発掘と科学精神」との見出しで「仁徳陵の発掘に対して権威ある学者間の賛否両論あるを知つて、私は不思議にたえなかつた。千五百年も前のもはや考古学的存在である皇陵を発掘することによつて、何か神聖なものを侵すというそうした感じ方そのものが、ひどく近代的な知性と相反する」等とするものである。

七、「一部新聞の暴論」（『神社新報』）

『神社新報』昭和二十四年五月二日付（第三面）の「米考古学者の発掘慾／仁徳天皇御陵に着目／国民感情をどうするで賛否両論」との見出しの記事は、六、「仁徳陵を発掘の提案」（『読売新聞』）で『読売新聞』同年四月二十七日付の記事の内容を報じたものである。

『神社新報』同年五月九日付（第一面）の「陵墓の神聖を護らむ／一部新聞の暴論／異常な憤激を呼ぶ／各方面の駁論を聞く」との見出しの記事は、明大教授後藤守一氏「誤解してゐる読売紙」、神社本庁座田教化部長「許せぬ信仰蹂躙」、国大図書館佐野大和氏「今更ら調査の必要なし」、神道文化会木下専務理事「学べ治水の御事蹟」、文部省人文科学局「誤報も甚だし」との談話を載せる。このうち後藤守一氏の「誤解してゐる読売紙」は次の通りである。

この話の発端は昨年ライシヤワー氏と会談した時、私達から「今迄古墳に対する行過ぎた抑制があつたゝめ充分古代史を明らかにすることが出来なかつた、もとより祖先の墓をあばくことは好ましくはないが学者が集まつて慎重な態度で古代史を明らかにすべきだと思ふ、それには莫大な費用がかかるので政府に対し顧問団からも助言してほしい」と話したことがある、その時も御陵墓はもとより発掘の対象とすべきではないとの意見が出、これ

については父君の時代から日本に住まれ日本に生れ、日本史の講義をハーバード大学で受け持ち日本の国民感情についても良く理解してゐるラ氏はよく了解して帰へられたのである、ラ氏から最近寄せられた手紙といふのも未だ読んではゐないが、聞く所によると一、日本の古墳発掘調査に米国学者の参加する余地ありや二、出土品のダブつてゐるものはその一つを米国に貰へるかこの二点が可能なら発掘資金を募集し得られるいつた意味のことであつて、決して読売紙の伝へる如く仁徳天皇御陵の発掘を提案慫慂して来たものではない、仁徳天皇の御陵発掘の話は蘭人で市川に考古学研究所を設立し、石器時代を研究してゐるジエラード、グロードといふ人が私に相談して来たことが二年程前にあり、この時私は絶対に不賛成である、日本の法律では所有者がある時は古人の墓を掘ることは禁じられてゐると答へて置いた、この話がラ氏の話と混合されてあの記事になつたのではないかと思ふ[27]

また、同じく第一面は「日本考古学協会／態度を決定」との見出しで同年五月二日に明治大学で開かれた「日本考古学協会委員会」の結果を伝えた。これは六、「仁徳陵を発掘の提案」（『読売新聞』）でみた『読売新聞』同年五月三日付の「仁徳陵発掘はしない」との見出しの記事と同じ会議についての記事であるが、『読売新聞』のいう「古墳調査に関する懇談会」を『神社新報』は「日本考古学協会委員会」とし、会議の内容についても「ラ博士が仁徳陵の発掘を提案したことはなく、読売紙の誤報に訂正方を申入れる案もあつたが、今回はただラ博士の日本文化への協力を期待する旨の回答に止め」たとする。

『神社新報』は、本稿で注目している終戦直後に限っても陵墓をめぐる問題について詳細に報じ、かつ、独自の立脚点による論調を展開する。これについては別稿を期したい。

八、「ジャーナリズムへの抗議」（『文芸春秋』）

『文芸春秋』昭和二十四年七月号は、後藤守一「仁徳陵、発掘するべきか――ジャーナリズムへの抗議――」を載せる。五、“Grave of Emperor May Be Excavated”でみた『ニッポンタイムス』同年三月三十一日付の記事について次のように述べる。

私はその二回目の記事（引用註、『ニッポンタイムス』同年三月三十一日付の記事）を読んで、それが全くのまちがいであると思つた。第一に、日本の考古学者というと、相当多数の人があるし群少のなかには、仁徳陵発掘すべしというような聲もあるかもしれないが、少くも権威ある学者の間には、そんな馬鹿気た考を持つてゐる者のないことは十分に承知しているし、またライシャワー博士の人となりを知つている私としては、博士にもそんな計画を持つていないことを確信を以て断言できるからである。[28]

そして後藤氏は次のようにもいう。

しかしこういうことはあつた。ライシャワー博士たちが渡日され、各分科の人文科学の学者たちと討議した時、われわれは、考古学研究によつて、正しい日本古代史を書きたいと念願している。そして日本考古学研究の中、古墳文化の究明が一番おくれている。それは、従来の宮内省方面の誤つた取締にわざわいされていた為めであるが、今後はその誤つた取締も是正されるであろう。そこで、計画の下に古墳発掘をやりたい。しかしそれには相当多額の費用を要するであろうが、今日の事情では、国家の財力応援を受けるより外に途はないと思うから、顧問団でこれを御賛成くださるならば、日本政府に適宜のアドバイスをして頂きたいということを申し入れて、その快諾を得たことがあり、更にその顧問団からの勧告もあつて、わが考古学研究の長期計画の一として古墳発掘を全国の学者が手分けをしてやることとし、先ずその第一期を五カ年と定めて、それぞれの案をたてたのである。[29]

つまり、『ニッポンタイムス』も『読売新聞』も誤報であり、ライシャワー博士も日本の考古学者の大部分も仁徳天皇陵発掘など考えてもいない、というのである。

九、「上代古墳の綜合研究」（『日本考古学年報』）

『日本考古学年報』1（昭和二十三年度）（昭和二十六年十月、誠文堂新光社）は、「第一部研究の趨勢」藤田亮策[30]「考古学一般」で昭和二十三年四月二日の日本考古学協会の設立について述べるなかで「（略）登呂遺跡調査の如き全国的学者の協力によつてのみ行われる研究は、協会の特別委員会として自らこれに当ることとなつたのであるが、この外にも全国的に協力研究を必要とするものが少なから

ず数えられる。協会は成立と同時に、これ等の内から古墳の全国的綜合研究、縄文土器文化の編年的研究、日本における考古学研究の現状調査、発掘ならびに出土品の法規に関する調査等の問題を取上げ、これを協会の事業として達成する目的のために、3つの特別委員会を作り、現状調査については全委員の責任とし、まず昭和23年年報編纂を計画した。これらの調査事業は何れも多額の研究費を必要とするので、昭和24年度の文部省科学研究費を申請することとし、各特別委員会はその準備を進めた[31]」とし、日本考古学協会の事業として「古墳の全国的綜合研究」を昭和二十四年度の文部省科学研究費を得て行なう予定であるとする。なお、同研究を担当する「上代古墳の綜合的研究特別委員会」は、梅原末治氏（委員長）、小林行雄氏、末永雅雄氏、斎藤忠氏から成る[32]。

『日本考古学年報』2（昭和二十四年度）（昭和二十九年四月、誠文堂新光社）は、「第一部研究の趨勢」藤田亮策「考古学一般」で「古墳綜合研究特別委員会[33]」について次のように述べる。

古墳の発掘調査が、各地で活発におこなわれたことは前に述べたが、全国の古墳の分布とその地方的特質、ならびに形式差については、十分の調査がおこなわれず、上代古墳の築造年代についての考察も、各研究者の独自の見解と材料とによるもので、科学的研究の面から遺憾の点がすくなくない。さて、梅原末治氏を主班とする全国的綜合的研究を計画し、まず各府県単位の古墳分布調査と主要古墳の発掘調査を目標とし、とくに畿内陵墓の形式を基準として、地方古墳の性質をあきらかにすることに努力することとした。梅原末治氏以下4氏の特別委員が中心となって、「上代古墳の綜合的研究」なる研究題目で、科学研究費を申請した結果、「考古学の綜合研究」の班研究の一として、70万円の研究費補助が与えられた。さて19氏の研究分担により、この困難の問題に取り組み、各分担研究者はさらに数人ずつの地方在住者の助力を得て、出発したのである。

この研究は、古墳の分布調査、陵墓を中心とする古墳群の基礎的調査、地方的特色を有する古墳の発掘調査の方針に基づくのであるが、とくに分布調査が初年度の基本となるもので、分布にはカード記入法を採用し、五万分一地形図に位置を記入することによりこれをまとめ、着手し易い地方から開始した。したがって畿内では大

和・河内・摂津・山城、山陰方面の鳥取・島根両県下、関東の東京・埼玉・群馬等に、分布調査を始めたのである。畿内の陵墓の実測図を写すことを宮内庁から許可を得たことも、古墳としての大和、河内の陵墓が最大であり、もっとも形式が整っているからである。仁徳、応神両山陵の構造、ならびに築造法の研究に、最初の一歩を踏み入れたのもそのためである。[34]

これによれば、この研究は全国の古墳の科学的研究を文部省の科学研究費によって行なおうとするもので、古墳には陵墓も含む。しかも、研究の目標は「各府県単位の古墳分布調査と主要古墳の発掘調査」であり、そのために「とくに畿内陵墓の形式を基準として、地方古墳の性質をあきらかにすることに努力する」というのをみれば、陵墓がこの研究の中心であることは明らかである。ここにみえる「主要古墳の発掘調査」に陵墓の発掘調査が含まれるかどうかは明確でないが、「畿内の陵墓の実測図を写すことを宮内庁から許可を得た」というのであれば、陵墓については「実測図」による研究を指向していたと解するのが妥当であろう。右の引用にみえる「19氏の研究分担」というのは、梅原末治・樋本亀次郎・小野勝年・小林行雄・森貞次郎・鏡山猛・末永雅雄・水野清一・七田忠志・後藤守一・斎藤忠・大場磐雄・駒井和愛・清水潤三・関野克・和田軍一・土井弘・黒板昌夫・有光教一の各氏である。[35]

『日本考古学年報』3（昭和二十五年度）（昭和三十年四月、誠文堂新光社）は、「第一部研究の趨勢」藤田亮策「考古学一般」で昭和二十五年度にも「上代古墳の総合的研究」として「京都大梅原末治」外六名による各個研究に科学研究費が支給されたことを述べつつ、[36]同研究を担当する古墳綜合研究特別委員会について次のように述べる。[37]

古墳の綜合研究のうち、古墳分布調査は前年度に引続き、滋賀・福井・山口・鳥取・三重・神奈川等の各県下にわたり、古墳カードと分布図作製の事業が進められた。また近畿の陵墓を含む古墳群の調査としては、仁徳・応神両天皇陵の建築、土木上の研究が開始され、京都大学名誉教授高橋逸夫氏の協力により、興味ある実績が示された。特殊調査としては、筑前糸島郡一貴山銚子塚の発掘が、小林行雄氏の主任の下におこなわれ、構造の特異性とともに鏡鑑等の多数が発見され、注目すべき結果をあげることができた。

この委員会は、文部省科学研究費をうけるに当り、各

個研究として申請したために、比較的少額の研究費を支給されたにすぎなかったが、このような好結果をあげたことは慶ばしい[38]。

『日本考古学年報』4（昭和二十六年度）（昭和三十年十二月、誠文堂新光社）は、「第一部研究の趨勢」藤田亮策「考古学一般」で昭和二十六年度にも「上代古墳の綜合的研究」（代表梅原末治氏）として三十五万円の科学研究費（総合研究）が交付されたことを述べ、同研究を担当する「古墳綜合研究特別委員会（古墳委）」の構成が、梅原末治氏（委員長）、藤田亮策氏、末永雅雄氏、斎藤忠氏、小林行雄氏[39]であることを記すとともに、同委員会の活動について次のように述べる。

上代古墳の綜合的研究の研究題目をもって、科学研究費総合研究として35万円の交附金をうけ、各分担研究のうちに、とくに、徳島・香川・和歌山・岐阜・愛知・大分・長崎の7県の古墳分布調査を実施した。昭和24年以来の古墳の総合的研究は、東海以西がほぼ見当がつき、分布カードと分布図もできたが、経費の関係上不十分のものあり、関東地方はほとんど着手した程度にすぎなかった。26年度の研究分担者と協力研究者を下に列記する。

古墳分布の総合的研究　梅原末治
古墳群としての陵墓調査　小林行雄
関東東海地方古墳分布　後藤守一
岐阜県下古墳分布　阿部栄之助
愛知県下　〃　澄田正一
近畿地方の古墳分布　末永雅雄
四国中国の古墳分布　樋口隆康
徳島県　〃　沖野舜一
香川県　〃　福家惣衛
九州地方の　〃　藤田亮策
大分県古墳分布　賀川光夫
長崎県　〃　七田忠志[40]

陵墓については地域別とせず「古墳群としての陵墓調査」として別立てになっているのは注目される。

十、「立入り調査」「條件を附して承認」

日本考古学協会をめぐるこの問題の経緯については、右にみた『日本考古学年報』の他、『書陵部紀要』第一号（昭和二十六年三月、宮内庁書陵部）の「書陵部官制の変

遷」（小川省三記）の次の記述は重要である。

昭和二十四年八月日本考古学協会が文部省科学研究費により古墳の全国的綜合研究調査を行ふに当り陵墓もその一環に加へたい旨の願出があり、一切現状に変化を及ぼさないといふ條件でこれを許可したこともある。[41]

さらに、小林行雄「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」（『書陵部紀要』第五十三号〔平成十四年三月、宮内庁書陵部〕）は、小林氏が、昭和二十六年に円山陵墓参考地を、昭和三十三年に入道塚陵墓参考地を調査した際の報告であるが、平成元年二月二日の小林行雄氏の逝去の後に坪井清足氏による編集・原稿執筆を経て『書陵部紀要』に掲載されたものである。[42]その坪井清足氏による「はしがき」には「調査の発端からこの報告刊行に至る経緯などについて新たに稿を起こし[43]」た「略年譜」があるが、そこには次のように記されている。

昭和24年8月12日、日本考古学協会委員長（藤田亮策）、古墳墓の全国的総合的調査研究の一環として陵墓への立入り調査を願出る。同月30日、条件を附して承認される。[44]

十一、「帝陵をあばくということは考えられず」（『毎日新聞』）

『毎日新聞』昭和二十四年九月八日付（第二面）は「秘められた御陵を探る／日本歴史の源を究明／日本考古学協会今秋から外郭調査」との見出しで、右にみた「立入り調査」について報じる。次の通りである。

この調査は発掘を行わず外部の輪郭及び構造から時代史的考察をなし大陸との関連を究明し、日本国形成のカギを見出そうというもので、日本考古学協会が昨年十一月上代古墳綜合的研究特別調査委員会を設置、京大梅原教授が委員長となり小林講師（京大）末永龍大教授、文部省斎藤忠氏の各委員が実行方法を研究、本年五月の考古学総会で古墳研究に御陵を含むか否かにつき最後的検討を行い、御陵を調査範囲に含まねばならぬと意見一致、その後宮内庁、文部省と折衝の結果このほど漸く実現の運びとなつたものである

この調査に対し文部省では科学研究費七十万円を支出することに決定しているので、考古学協会では十日午後一時から東大考古学教室で古墳調査特別委員会を開

き、御陵調査の実行方法を検討、その結果をもつて更に京大考古学教室で委員会を再開、調査御陵を決定、直ちに開始する。

これに続けて、「奈良西郊の御陵群から着手／京大梅原教授談」との見出しで、梅原末治氏の談話を載せる。以下の通りである。

歴代御陵の調査は日本考古学会(ママ)古墳墓小委員会の古墳墓調査五ヵ年計画の一環として宮内庁に許可を申請中であつた、御陵は従来絶対近づけない神域とされていたが、今回の許可で初めて学界に具体的に紹介されるわけである

御陵内部は同時代の他の墳墓から究明出来るし、どこの国でも帝陵をあばくということは考えられず、強いてその必要もない、今回の御陵調査は畿内（近畿）のものを中心に草枯れを待つて十一、二月ごろ始めることになろう

まだ委員会に諮つていないが、まず奈良市西郊の御陵群（神功皇后、成務天皇、日葉酢媛、磐之媛、オオナベ、コナベ各陵）から着手したいと思つている。畝傍在住の陵墓監山崎鉄丸氏を加え専門家立会でやることになる（京都発）

「御陵内部は同時代の他の墳墓から究明出来る」「どの国でも帝陵をあばくという事は考えられず、強いてその必要もない」とあるのをみれば、発掘を全く考えていないことは明白である。留意すべきことは「畝傍陵墓監山崎鉄丸氏を加え」とあるように、調査への「陵墓監」の参加を前提としていたことである。そして同記事は左の通りの宮内庁の談話を載せる。

宮内庁書陵部本郷庶務課長談

考古学会で御陵を外面的な構造上から調査したいという申入れがあつたのを許可したもので御陵を発掘することではない、宮内庁で以前調査した記録もあるが、学問的なものではないので、今度の調査で立派な資料の得られることを望んでいる

これを見る限り、日本考古学協会による立ち入り調査には宮内庁も協力的で期待も抱いていたことがわかる。

『毎日新聞』昭和二十五年三月二十八日付（第三面）は、「世界最大の墳墓／応神陵初の空中写真」の見出しの記事と写真「米軍提供の応神陵」を掲載した。記事は次の通りである。

【大阪発】京大梅原末治博士の発表で〝世界最大の墳墓〟と折紙をつけられた大阪府南河内郡の応神陵〝恵我藻伏岡陵〟は日本考古学協会古墳特別委員会によつて逐次解明されようとしているが、このほど初の空中撮影写真が米空軍の好意により本社に提供された。

応神陵は京大名誉教授高橋逸夫氏の報告によると前方後円形で長さ四百十六㍍、前方部の幅三百㍍、後円の直径二百五十六㍍、同高さ卅六㍍で、堆積（土量）百四十三万三千九百六十立方㍍、底面積十万九千四百卅五平方㍍でエジプト・ギゼーのピラミッドよりはるかに大きく、この製造に要した人員は土盛りだけで延べ百四十三万四千人、さらに葺石の運搬、土堤、墳丘上の数万本の円筒ハニワの製作などを入れると二百万を下るまいとされている

この「京大梅原末治博士の発表」の具体的な内容は不明であるが、主旨としては十二、「自由に除いて調査することの不可能な現在」（『書陵部紀要』）でみる梅原末治「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」と同じである。

十二、「自由に除いて調査することの不可能な現在」（『書陵部紀要』）

『書陵部紀要』第五号（昭和三十年三月、宮内庁書陵部）は、梅原末治「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」を載せる。これは梅原末治氏による論文ではあるが、実質的には右にみた日本考古学協会古墳綜合研究特別委員会が文部省科学研究費による「上代古墳の綜合的研究」の成果である。その経緯について梅原氏は次のように述べる。

然るに太平洋戦の敗北が一つの契機となって、此の種の調査に就いての途が開かれた。依って新たに結成した日本考古学協会の古墳委員会では、日本学術研究会議の科学研究費の助成に基く調査研究をはじめるに当り、この問題を取り上げて、その基本的な調査を行ふことを企画した。幸にもそれに就いて、陵域を管理せられている宮内庁書陵部の当局からは、基準となる正確な実測図を提供されたばかりでなく、部分的な外面調査をも許容されることになった。そこで前者からする容積の検出に就いて、京都大学工学部の高橋逸夫教授に専門の立場からする協力を求めて一九四九年度から調査に従事し、二年間

でほぼ満足すべき結果を得ることが出来た。かくて平面形の上では仁徳天皇陵の最も大きいことに変りはないが、陵そのものの容積に於いて応神天皇陵が首位を占める事実が確められることになったのである。

いまここに調査の責任者として此の報告書を公にするに当って、以上の点を記して先づ負ふ所を明にすると共に、協力者たる高橋教授なり、なお葺石の石質の鑑定に就いての京都大学理学部松下進教授の教示を受けたことを記して謝意を表したい。[45]

次いで同論文は、仁徳天皇陵・応神天皇陵・履中天皇陵の順で各天皇陵について論じる。その中で、陵墓の内部で実地に観察した内容を述べた部分は右の通りである。

〔仁徳天皇陵〕

①然るに此の（引用註、埴輪の）円筒列は、現状では囲繞してゐる工合を確めることが出来ず、墳丘にあっては破片の散在状態、殊に前方部のそれから単に推測を加へ得るに過ぎない。そしてほぼ動かないものとして、その下方の第一第二の両段の傾斜面に接して樹てられてゐたことが窺はれる外、なほ墳丘の根廻りにも存したらうことを想察せしめるものがある。[46]

②墳丘と違って一部分ではあるが囲繞の実際の分るのは中堤の円筒列である。現在明にそれの認められるのは、後円の東側に当る部分である。そこでは幅広い中堤の内側の傾斜面に近く、施された葺石の上縁に接して円筒が輪を並べたやうに約二寸の間隔で埋れてある。従って円筒列がこの部分に繞らされた事が知られる。その円筒は径凡そ一尺三寸厚さ五分のかたく焼締ったものである。中堤の外側ではなほ、右のやうな確かに囲繞してゐる工合は認められないが、守陵の人達の所見では、清掃に当って、円筒片がよく注意に上って、そこにも繞らされたことが推されると云ひ、更に往年最も外の濠の修築の際、第二の濠の外の土堤でも、北半で円筒列の遺存が確認せられたとの事である。[47]

〔応神天皇陵〕

③この陵でも墳丘の表面に葺石が施され、また埴輪円筒を繞らして、後者が外堤に及んでゐることが挙げられる。この両者のうちで、葺石の方は施されたのは段築の傾斜した面に限られて、各段の上の平な部分には、それが認められない。この点仁徳天皇陵の場合と違って、土砂の流失に対する実際上の設備たることを思はしめるものが

ある。葺石は拳大よりもやや小さな川石を密に一尺位の厚さに敷き固めてあるやうで、今も可なり原形をのこしてゐる。

埴輪円筒列の囲繞は、もと上面に露出した部分はすべて失はれた上、土中に樹てられて残存する部分も、腐植土がそれを覆うてゐるので、それ等を自由に除いて調査することの不可能な現在では、単に到る所に見受けられる破片から、墳丘を何重かに繞ってゐたことを推し得るにとどまる。ただ此の場合、高い主丘上の平坦な部分の縁に近く、前方丘上の東側で、葺石の上限に接して、円筒の破片の多いことは、其の囲繞した部位を示唆するものとして記すべきであらう。この部分にはまた蓋形埴輪の破片を見受ける。別に同じ附近から見出されたと云ふ楯や蓋形などの象形埴輪片の相当な分量が、御陵の監視所に保存されてあって、この種の埴輪のもと前方部に樹てられたことをも推さしめるものがある。[48]

④これ（引用註、前方部）に較べると外堤の場合は、いまなほ所々の地表面に埴輪円筒が恰も輪のやうに上面を露出してゐて、囲繞の実際が認められる。尤もその露はれてゐるのは部分的で、すべてに亙ってゐないので全貌を確めるに欠けるところがある。併し認め得た左右両面側での所見からすると、上面の平な幅広い堤上の両側にあって、それぞれゆるい傾斜面につづく位置に樹てられてゐて、円筒相互は密接してゐる。そして各円筒は、現存するもとの下辺に近い所の径一尺一、二寸の間のものを主として、別に所々に径一尺八寸内外の大きいものを配してある。尤も両者が数の上で如何なる関係にあるかは、或部分では普通の円筒二つを挟んで大きな円筒があるのに対し、他では、普通の円筒が数多く並んでゐるので、それが確められない。外堤では右の円筒列二匝の外、現在形象埴輪の有無など明でないが、周濠から水鳥や蓋埴輪が出土して居るに加へて、『日本書紀』の雄略天皇九年の条に録した田辺史伯孫の説話からすると、埴輪馬はじめ其他がその間に樹てられてあったこと、往年調査の行はれた上野国群馬郡上郊村大字保渡田八幡塚古墳に於けると同様であったと推測されるのである。こう見て来ると本陵の原形たるや、現在松柏で覆はれたものと頗る様子の違ったことが知られるのである。[49]

いずれも実際に墳丘に立ち入っての観察に基づいて著されたことは明らかである。また、②にみえる「守陵の人達

の所見」以下や、③にみえる「御陵の監視所に保存」されている「象形埴輪」の指摘によれば、宮内庁の側との連絡も観察の現場で存したことがわかる。さらに、③の埴輪円筒列の囲繞についての説明に「土中に樹てられ残存する部分も、腐植土がそれを覆うてゐるので、それ等を自由に除いて調査することの不可能な現在」とあることは重要である。まさに、十、「立入り調査」「條件を附して承認」でみた「一切現状に変化を及ぼさない條件で」という立ち入りの「許可」の具体的な様子がここに明確である。

十三、「石室実測」（円山陵墓参考地）

十、「立入り調査」「條件を附して承認」でみた小林行雄「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」の坪井清足氏による「はしがき」は、昭和二十六年四月の円山陵墓参考地の調査について述べる。次の通りである。

昭和26年3月7日、同協会（引用註、日本考古学協会）古墳綜合研究特別委員会委員長梅原末治京都大学教授、先に承認された陵墓立入調査の一環として円山陵墓参考地および黄金塚陵墓参考地の実測調査を願出、同月24日、許可される。

昭和26年4月14日、円山陵墓参考地の調査に着手し、同月28日、終了する。

調査主任：小林行雄。調査参加者：坪井清足、樋口隆康、横山浩一、藤沢長治、原口正三、林巳奈夫、（京都大学文学部写真技官）高橋猪之介

第1日（4．14）石室の現状は、羨道の入口に近い天井石が前方に落下して出入口ができているほかに、玄室内の天井石の1個が落下し、墳頂に孔があいている。そこで内部の清掃は、羨道と玄室と2班に分けて着手した。

第2日羨道除土。

第3日玄室を前部と後部にわけて除土。前部に石棺蓋半折して倒転せるを見いだす。羨道部にも破片あり。

第4日棺蓋の幅1．2m、一部に丹付着せり。羨道奥より環頭大刀把頭出土。他に刀剣装具らしき金具を検出。

第5日玄室前部の棺蓋に属する破片が羨道から発見された。羨道底面に鏃・瓶子・蓋などの須恵器あり。玄室奥部にてもべつの石棺蓋を検出す。

第6日玄室除土をつづく。

第7日玄室奥部石棺の底石を検出。羨道部にて羨門封鎖

装置の石積を調査、その上部より金銅雲珠1個を検出。
第8日玄室清掃。棺側に鉄鏃若干あり。羨門部にて雲珠さらに1個を検出。鉄槍1片あり。
第9日石室実測。
第10日環頭、金環2個採集。石室実測。
第11日石室実測。羨道奥に前方棺の底石あるを確認せるも、落下せる天井石の下にあるため調査するをえず。
第12日玄室奥の石棺蓋を底石上に安置。前の石棺蓋を羨道奥に搬入し、破片を接合して置く。
第13日・第14日実測。
第15日埋戻[50]。

これによれば円山陵墓参考地の調査は、「先に承認された陵墓立入調査の一環」とはいっても、十二、「自由に除いて調査することの不可能な現在」（『書陵部紀要』）でみた仁徳天皇陵・応神天皇陵の場合とはおよそ趣が異なる。すなわち、仁徳天皇陵・応神天皇陵では土中の埴輪を観察するために腐蝕土を「自由に除いて調査すること」すら「不可能」であったのに対して、円山陵墓参考地では石室内部が清掃・実測され石棺や副葬品までもが直接観察されている。これは「一切現状に変化を及ぼさないといふ條件でこれを許可した」というのと全く矛盾する。そのことを考えるについては、坪井氏による「はしがき」の右の引用の後に次のようにあることが参考になる。

昭和33年3月28日、これより先、小林氏、陵墓参考地調査（6カ年計画）の一環として、調査要目（墳丘及び内部主体の実測、立地、時代など）を付して円山・入道塚両陵墓参考地の調査を依頼されていたところ、この日、調査費配布の通知を受ける。但し、円山陵墓参考地については、昭和26年の調査成果をもって代えることとなったようである[51]。

つまり円山陵墓参考地の調査は、日本考古学協会が宮内庁に立ち入りを願い出た上で実施されたものの、後に宮内庁による陵墓参考地調査に引き継がれたのである。入道塚陵墓参考地の調査は昭和三十三年度五～六月に実施され、石室内部が清掃され、石棺・副葬品が観察されている[52]。

十四、「石室実測図」（黄金塚陵墓参考地）

陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」（『書陵部紀要』第五十九号〔平成二十年三月、宮

内庁書陵部）は、「2既往の調査」「（1）日本考古学協会古墳総合研究特別委員会による調査〔昭和26年（1951年）〕」として、同委員会による黄金塚陵墓参考地の調査について述べる。次の通りである。

現地調査は小林行雄氏を調査主任とし、坪井清足・藤沢長治・川端（西谷）真治・樋口隆康・横山浩一の各氏により、外堤を含む周辺の測量図（第2図）（引用註、図略）・石室実測図（第3図）（引用註、図略）の作成、および写真撮影（撮影：高橋猪之介氏、図版4～7）（引用註、写真略）が行われた。調査期間は昭和26（1951）年6月9・10日、7月30日～8月1日の計5日間である。これらの原図・写真原板等の資料は、現在、京都大学文学部考古学研究室において保管されているが、具体的な記述などによる調査報告は確認されていない[53]。

右の引用について註は「京都大学において原図を確認した結果、6月9・10日に石室の実測を開始し、写真撮影もこの時行っている。その後、7月30日～8月1日で、石室実測図の未完成箇所の追加及び修正、断面図等の補測を行ったことがわかる。また、外堤をはじめとする周辺の測量は7月31日・8月1日に実施している[54]」とし、引用中の「外堤を含む周辺の測量図（第2図）」を「第2図黄金塚陵墓参考地墳丘および外堤測量図〔昭和26年作成〕（1／600）[55]」として、「石室実測図（第3図）」を「第3図黄金塚陵墓参考地石室実測図〔昭和26年作成〕（1／60）[56]」として計九葉載せ、高橋猪之介氏による写真を図版4～7として計九葉載せる。

そうしてみると、昭和二十六年六～八月の黄金塚陵墓参考地の日本考古学協会古墳総合研究特別委員会による調査では、石室の実測・写真撮影、また外堤等が測量されたが、その資料は今日に至るまで京都大学文学部考古学研究室で保管されたままで、報告書は作成されなかった、ということになる。さらに陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」は、宮内庁による陵墓参考地調査の一環として昭和三十三年八月十一～十三日に、委託を受けた末永雅雄氏によって、同氏ほか九名による墳丘と外堤の測量図の作成と写真撮影がなされたことを記す[57]。

この黄金塚陵墓参考地の調査もすでにみた円山陵墓参考地の調査と同様に、調査が石室内部の観察や実測に及んだ点、また報告書が作成されなかった点は注目されるべきである。

さて、その後の日本考古学協会による文部省科学研究費の交付を受けての研究の動向はどのようなものであったのであろうか。

『日本考古学年報』5（昭和二十七年度）（昭和三十二年三月、誠文堂新光社）は、「第一部研究の趨勢」藤田亮策「考古学一般」で「古墳綜合調査特別委員会」[58]の動向について「日本全土の古墳の分布調査を中心として、綜合的に、形式、構造、副葬品から、時代と発達課程を知るために、昭和24年より科学研究費の交附を受けて、3年の研究を終った。しかしながら全国の古墳の数は、おびただしいものがあり、戦時中および終戦後の開墾・伐木等の関係上、新に発見されたもの莫大に上り、かつまた発掘破壊されたものに至っては、これを凌駕し、とくに関東以北に甚しいものがある。したがって東海以北は、遅々として調査が進まず、東北北陸には分布調査の手も及ばずして、3年を経過した」と、三年にわたる「上代古墳の綜合的研究」の成果と問題点を指摘した上で「さて本年よりさらに3年の予定で、東北・北陸・東山地方への畿内文化の浸透と、その発展とを知ることを目標として、『日本古代文化の東北北陸東山地方への伝播に関する基礎的研究』なる研究題目を掲げて、科学研究費の交附を受けることとなった」[59]とする。「日本古代文化の東北北陸東山地方への伝播に関する基礎的研究」（代表藤田亮策氏）は「科学研究費――綜合研究――」として三十万円を受給したが[60]、ここに至って陵墓調査は、日本考古学協会内に設けられた古墳綜合調査特別委員会の範囲から外れたことになる。

おわりに

右にみた陵墓をめぐる動向は、おおむね昭和二十一年から同二十六年にかけてのものである。いずれも占領下であり、本稿でみたその間の刊行物についても、直接・間接に占領軍による検閲の影響を受けていたと考えなくてはならない。

その上で本稿で取り上げた資料に拠って概略をたどり直してみれば、昭和二十三年に『科学朝日』『アサヒグラフ』といった朝日新聞系列の出版物による仁徳天皇陵に関する記事があった後、昭和二十四年には英字紙『ニッポンタイムス』と『読売新聞』がライシャワー氏を中心とする動向を報じる中で発掘推進論を展開し、これに『神社新報』が

反論し、日本考古学協会は陵墓を含めた古墳研究を文部省による科学研究費によって進める中で宮内庁に陵墓への立ち入り調査の許可を求め、宮内庁も現状に変更を及ぼさない条件でこれを許可し、仁徳天皇陵・応神天皇陵についての報告は昭和三十年三月になって『書陵部紀要』に掲載され、円山陵墓参考地・黄金塚陵墓参考地については石室内部にまで及ぶ調査が行なわれたものの、事実上宮内庁による陵墓参考地調査に引き継がれた、ということになる。

しかし、終戦直後の陵墓をめぐる動向について考えるに際して重要なことは、当初、その担い手は決して国内の考古学関係者に限られたのではなく、広く歴史学・人類学関係者、そして皇族、アメリカの学者にまで拡がったものであったのであり、報道各社も競うようにこの問題を取り上げ、その議論も明らかに陵墓の発掘を視野に入れたものであったことである。この間各界、また一般もよく反応し、発掘に対する賛否両論が展開されたのは、陵墓をめぐる問題が社会一般の問題として捉えられた何よりのあらわれである。それがその後、日本考古学協会が文部省科学研究費による調査の一環としてこの動向に関与するようになって以降、まず陵墓の発掘が調査の選択肢から消え去って墳丘上の表面調査に取ってかわり、報道も沈静化し、挙句の果てにその成果が『書陵部紀要』に掲載され、陵墓参考地の調査が宮内庁による調査に引き継がれたのに至っては、いわば、考古学関係者が宮内庁の側に取り込まれる態を如実に示したものであり、事柄の著しい変質として捉えざるを得ないものである。

それでは、いったい何がそのような変質をもたらしたのであろうか。占領下にあったこと等を含めて当時の政治的・社会的背景を含めて考えなければならないことは確かではあるが、陵墓をめぐる問題を、関連諸分野を含めた学界はもとより広く社会一般の問題として議論しようとする立場と、管轄官庁の厳重な管理下にある古墳についてせめて表面調査だけでも成就させようとする考古学関係者の連合体の姿勢とは、決して同じ平面に並べられるようなものではないことは、本稿でみた一連の過程から明らかである。終戦直後の陵墓をめぐる動向が一見わかりにくい経過をたどり、その発端からすればいかにも一貫性のない結末を迎える原因は、ここにこそ求められるのである。

註

（1）向谷『考古の巨星』一〇六～七頁。

（2）以上「展覧会」については「疎開から展覧会へ」（大窪太朗記）（『書陵部紀要』第一号）（六十三・六頁）による。当時図書寮は、昭和二十一年三月三十一日に廃庁となった諸陵寮を引き継いでいた。

（3）「疎開から展覧会へ」六十三頁。

（4）「疎開から展覧会へ」六十三頁。

（5）国立国会図書館憲政資料室所蔵プランゲ文庫マイクロフィルム。「占領期新聞・雑誌データベース」に拠った。同文庫の検索については以下同じ。

（6）梅原「世界一の大古墳・大山陵」十一頁。

（7）梅原「世界一の大古墳・大山陵」十一頁。

（8）梅原「世界一の大古墳・大山陵」十二頁。

（9）梅原「世界一の大古墳・大山陵」十二～三頁。

（10）国立国会図書館憲政資料室所蔵プランゲ文庫マイクロフィルム。

（11）『堺時報』第十二号、二頁。

（12）TAMOTSU MURAYAMA による記名記事。

（13）Japan's first emperor was not Jimmu Tenno but Sujin Tenno who most likely migrated from Manchuria or Korea early in the fourth century. This indicates that the Imperial Family was not founded in 660 B.C. as is claimed in modern official Japanese histories, but ten centuries later.以下『ニッポンタイムス』の記事からの要約・引用に際しては註に原文を掲げる。

（14）Japanese historians, archaeologists and ethnologists, Dr. Egami declares, are unanimous in the opinion that the time has come for a revolutionary change in writing the history of this country for popular reading. Dr.Egami further believes that there are many untouched fields in Japan for the archaeologist, historian, and ethnologist due to the noticeable easing of the hush-hush hands-off policy which for decades was adopted by the government regarding investigations into matters which were considered sacred.

（15）The custom was introduced of building gigantic mausoleums and it is to be noted that the burial ground of Emperor Nintoku is several times larger than the pyramids.

（16）TAMOTSU MURAYAMA による記名記事。

（17）Plans have quietly progressed for such an undertaking and have reached the point where Prince Takamatsu, Emperor Hirohito's second brother, is reliably reported to be slated to become chairman of an excavation committee.

（18）Meanwhile, it has been learned that Dr.Edwin O. Reichauer of Harvard University who is at present in the

United States, conferred with Prince Takamatsu some months ago regarding the proposed scientific research work.

(19) Dr.Hiroshi Ikeuchi, professor of history at Tokyo University and a scholar who is recognized as one of Japan's foremost historians, said that he was severely assailed some years ago when he proposed the excavation of a mausoleum regarding which there was at that time no record as to who might be buried within it.

(20) This unusual aerial picture, taken before the war by the Japanese army, shows the mausoleum of Emperor Nintoku.

(21) TAMOTSU MURAYAMA による記名記事。

(22) The account of plans to excavative the mausoleum of Emperor Nintoku which appeared in the Nippon Times earlier this week has stirred considerable interest not alone among scholars but among layman as well. This writer is in receipt of several inquiries, including some from Americans.

(23) TAMOTSU MURAYAMA による記名記事。

(24) Dr. Kiyoshi Mizuno と表記。

(25) At first it was thought that the work needed not to be conducted on such a gigantic scale as to necessitate the appropriation of government funds. But scholars from all parts of the country, meeting in Tokyo to discuss the project, have come to the conclusion that a vast monetary outlay will be necessary and that the work might take more than five years if it is to be undertaken in a proper manner. Those behind the five-year plan include Dr. Yoshito Hrada and Dr. Namio Egami of Tokyo University, Prof. Sousuke Sugihara of Meiji University, and Dr. Kiyoshi Mizuno of Kyoto University. It is their plan to have the Government introduce a bill during the present session of the Diet for funds to carry on the work. In the meantime these men are awaiting word from Dr. Edwin Reishauer of Harvard University who is understood to have discussed with the Emperor's second brother, Prince Takamatsu the possibilities of Harvard University taking some part in the mausoleum excavation project, and who recently returned to the United States.

(26) 『長崎日日』昭和二十四年四月二十七日付（第二面）も「世界最大の古墳／米から共同発掘申入れ／考古学界に賛否両論わく」との見出しの記事を「本社東京特電」として載せる（国立国会図書館憲政資料室所蔵ブランゲ文庫マイクロフィルム）。

(27) グロード神父は、昭和二十一年九月に千葉県市川市国府台に設立された日本考古学研究所の所長に就任しており、

後藤守一氏は同研究所の評議員長に迎えられている。ところが本稿でも後で述べるように昭和二十三年四月に日本考古学協会が設立されると、それまで日本を代表する研究機関のひとつであった日本考古学研究所もその役割りを日本考古学協会に引き継がれていった。日本考古学協会の幹部を兼務していた後藤守一氏も同年秋にはすでに日本考古学研究所を去っていた（領塚正浩「ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所――失われた考古学者を求めて――」〔鎌ヶ谷市郷土資料館編『鎌ヶ谷市史研究』第九号、平成八年三月〕）。

(28) 後藤「仁徳陵、発掘するべきか――ジャーナリズムへの抗議――」三十九頁。

(29) 後藤「仁徳天皇陵、発掘すべきか」三十九～四十頁。

(30) 日本考古学協会委員長。藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』1）十頁。

(31) 藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』1）十頁。

(32) 藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』1）十～十一頁。

(33) 昭和二十四年度における「古墳綜合研究特別委員会（略称古墳委員会）」の構成は、すでにみた昭和二十三年度の「上代古墳の綜合的研究特別委員会」の構成と同じ（藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』2）五頁）。

(34) 藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』2）六頁。

(35) 藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』2）九頁。

(36) 藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』3）七頁。

(37) 昭和二十五年度における「古墳綜合研究特別委員会」の構成は、すでにみた昭和二十四年度の同委員会の構成と同じ（藤田「考古学一般」〔『日本考古学年報』3〕九頁）。

(38) 藤田「考古学一般」〔『日本考古学年報』3〕九～十頁。

(39) 昭和二十六年度より藤田亮策氏が加わっている（藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』4）六頁）。

(40) 藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』4）六～七頁。

(41) 「書陵部官制の変遷」五十四頁。

(42) 小林「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」一～四頁。

(43) 小林「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」一頁。

(44) 小林「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」一頁。

(45) 梅原「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」は宮内庁書陵部陵墓課編『書陵部紀要所収陵墓関係論文集』（昭和五十五年、学生社）に再録された。同論文の頁は『書陵部紀要所収陵墓関係論文集』による。梅原「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」十九～二〇頁。

(46) 梅原「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」二十四頁。

(47) 梅原「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」二十四

頁。

（48）梅原「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」二十八～九頁。

（49）梅原「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と営造」二十九頁。

（50）小林「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」二頁。

（51）小林「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」二頁。

（52）小林「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」二～三頁。

（53）陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」二頁。

（54）陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」十七～八頁。

（55）陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」三頁。

（56）陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および石室内現況調査報告」四頁。

（57）陵墓調査室「黄金塚陵墓参考地墳丘および室内現状調査報告」四頁。

（58）昭和二十七年度における「古墳綜合調査特別委員会」の構成は、昭和二十六年度と同じ。

（59）藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』5）六頁）。

（60）藤田「考古学一般」（『日本考古学年報』5）五頁。

追記　英文の和訳については、本学文学研究科日本常民文化専攻博士課程（後期）三年川名里奈さんの協力を得た。記して感謝する次第である。

本稿は、平成二十一年度成城大学特別研究助成課題名「歴史教育と文化財の保存・活用をめぐる研究―歴史学・民俗学・教育史の成果を融合させて―」（研究代表者外池昇）の成果の一部である。これは、陵墓として管理されている古墳の文化財としての保存・活用についての議論のための基礎研究として本稿を位置付けたことによるものである。